普遍性と時代性 その隙間にあるオリジナリティ

PROFILE

デザイナー
辻村久信さん
建築・内装・家具とカテゴリーにとらわれない活動で評価を得るマルチデザイナー。最近では「リコルディ」の内装、自身のショールーム「MOON」などを手掛ける。クールかと思いきや超気さくな方で、個人的にもいろいろ為になる話を聞かせてもらっちゃいました。

河井義次郎の、何気なくも多層ある言葉が淡々と記される「いのちの器」。「自分は何がしたいのか、ふと考えてしまった時に読むとフッと心が洗われる」

目立たないのに個性的 そんな引っかかりがあるもの

辻村さんの手掛ける家具や空間は、近未来的なポップテイストを持ちつつ、古い町家にもしっくり溶け込む。過剰な情念やアクは感じられず、それでいて鮮烈な印象を与える。「僕の考えるデザインは普遍性・時代性・個性のバランス上にあるもの」。過激さのみを競う一発屋的なアヴァンギャルドとは違う。「目立たないのに個性的で、何か引っかかる感じ」。彼のセンスにピンとくるのは、繰り返す時代の流れの中でも、古くなるどころかますます研ぎ澄まされていくもの。それは彼の模索する新たな「伝統」でもある。「大衆が潜在的に求める根源的部分を、常に予期せぬ形で出していきたい」。そんな彼が最近インスパイアされたものとして12モンキーズやタランティーノの一連の映画を挙げていたのも、意外なようで頷ける話なのだ。

辻村氏のオリジナル家具を専門に展示・販売する「MOON」（麩屋町通夷川上ル西／075・212・4865）。「椅子ひとつでも置き場所やその人の生活スタイルまで相談して、大きさや色を微妙に調節したい」との理由でセミオーダーが主。鰻の寝床風に奥まで伸びた真っ白な空間には穏やかな外光が差し込み、ポップな色調の家具が居心地よさげにたたずむ。「僕の作品の根底にある『光』を、単に作品単位でなく学問や表現方法にまで発展できたら…」。なるほど、リコルディの浮遊感漂うライティングには思わず唸らせられる。目立たず個性的な光を操り、様々なシーンを引き出す彼は、さらに上手の確信犯なる演出家なのかも。

ハイテクな質感とロウな青やピンクの色合いが絶妙のハットスタンド。色の上に浮き出た微妙な光沢は、アルミの表面でなくガチそのものに直接彩色するワザで実現。

「個人的な作品として作った初めてのもの」。10年前メーカー依頼で制作した「メイクディム」。背部分のボールなど個性的だが、意外とおカタイ公共機関にウケがいいとか。

その名も「マーブル」なるチェアは、キャスターで動きまわるカワイイヤツ。「もうちょっとマーブルチョコみたいにしたい」。カラフルな色を揃えてグルグルやって遊びたい…（弥皇か）。

ブットボードシェルフはアルミとチークのコンビ。オーソドックスでいて、どこかキッチュな宇宙感覚が今っぽい。バラバラに組み直せるノックダウン式にデザイン性と機能性が共存。

「デザイン上では予期できないラインが出したくて…」。骨と皮膚をテーマに、金属フレームにレオタード生地を張り付け、困難な3次曲線を生み出したパーテーション。実は懐かしのファンシーケースの近未来型！？

取材・文／井口啓子　★写真／武藤育子